

マルクの教育意義を考える
—ブラジル・ポルトガル語エリアの活動事例を通して—

今里 和枝、吉野 朋子

A Look at the Educational Significance
of the MULC through the Activities of
the Brazilian Portuguese Area

Kazue IMASATO, Tomoko YOSHINO

The Multilingual Communication Center (MULC) is a place to support and promote student learning — most notably, learning of twelve languages, autonomy, and cross-cultural understanding — outside of class. At the MULC, students can experience various languages and cultures by feeling as if they were studying abroad. In the seven language areas, traditional buildings are displayed, and each area has books and educational materials through which students can learn about different regions. Students also can learn about these regions by participating in the cultural events held at each language area. Furthermore, MULC is a designated space for students to use the language they are studying by communicating with teachers and exchange students during the “chat-time” hour. Additionally, MULC is a space for socializing, not only between the students in the same major, but also with students outside their various majors. In this paper, focusing on these aspects, we discuss the educational significance of the MULC and describe some activities held in the Brazilian Portuguese Area during the 2009–2014 academic years. By observing these activities and analyzing some preliminary results from questionnaires answered by the students, we discuss multilingual / multicultural communication at the MULC.

キーワード：ポルトガル語、疑似留学空間、文化イベント、談話空間、
多言語・多文化コミュニケーション

1. はじめに

神戸外語大学多言語コミュニケーションセンター (Multilingual Communication Center: MULC, マルク) は、12言語の自律学習支援施設である。本稿では、マルクが持つ教育効果について論じ、ブラジル・ポルトガル語エリア (以下、「ポルトガル語エリア」と略す) で行われた活動を報告する。また、学生に行ったマルク利用に関するアンケート結果の考察を行う。

以下2章で、主に「疑似留学空間」という観点から、マルクの教育効果を論じる。3章と4章では、2009年度から2014年度の6年間に、執筆者の今里がポルトガル語の語学専任講師として行った文化イベントとポルトガル語によるコミュニケーション活動を報告する。5章では、前章で述べた活動内容とアンケート結果から、マルクにおける多言語・多文化コミュニケーションについて考察する。最後に、本稿の結論をまとめる。

2. 「疑似留学空間」としてのマルク

藤田 (2016:397) は、マルクについて、「海外に旅したり留学する感覚を味わいながら、12の言語と文化に接することができる疑似留学空間」と述べている。藤田 (2011) が説明しているように、各言語エリアでは、現地の街並みや建物が現地の資材を用いて造形され、各言語の書籍や視聴覚教材が置かれている。留学する感覚を味わいながら言語と文化を学ぶユニークな空間という意味において、マルクは「疑似留学空間」と言える。

マルクは、ハード・ソフトの両面において「疑似留学空間」としての特徴を持つ。藤田 (2011:221) は、スペイン語エリアで開催されたクリスマス・イベントに関して、「まるでスペインにいてクリスマスを過ごしているかのような幸福感が漂っている」雰囲気の中で、「疑似留学空間」としての魅力を実感したことを述べている。

マルクでは、こうした文化イベントを通して、「疑似留学」感覚を体験することができる。同時に、マルクは、外国語を使ったコミュニケーションの面においても、「疑似留学」感覚を体験できる場でもある。マルクの各エリアでは「談話空間」という時間があり、エリアの言語を母語とする語学

マルクのエデュケーションを考へる

専任講師や留学生と学生が交流できる時間を設定している。「談話空間」は、留学しているかのように外国語を使ってコミュニケーションができる場であり、その意味で「疑似留学空間」といえる。

語学専任講師と留学生は、大学の規定に基づき、指定された時間数の「談話空間」を担当する。語学専任講師は、週3コマ(1コマ90分)担当することが多い。語学専任講師は、「談話空間」の時間に、外国人留学生と協力しながら多くの日本人学生と交流する機会を積極的に作ることが求められている。平日2限-5限、および、昼休みの多くの時間は、語学専任講師か留学生が「談話空間」の活動を行っている。なお、各言語の「談話空間」の具体的な活動内容は、エリアによって異なる。

日本の日常生活の中では、英語以外の外国語を使ってコミュニケーションをする機会は、多くの場合限られている。「談話空間」は、外国語を気軽に使える機会を提供する目的があり、留学経験のある学生が留学中の時のように外国語を使ってコミュニケーションができる場でもある。また、1年生にとっては、留学経験者や留学生との交流を通して専攻言語や現地への関心を高める機会ともなっている。マルクでの「疑似」留学体験を通して、実際の留学に対する関心をより喚起する教育効果もあると考へる。

さらに、藤田(2011:222)が述べているように、学年を越えた縦のつながりが広がる場でもある。藤田の記述にあるように、教室での授業は同じ学年の学生が一緒であることが多いが、マルクができてからは学年を越えた縦のつながりが広がったという。1年生が上級生と交流することで、勉強や留学、大学生活に関する助言をもらえる場ともなり、学生同士が学年を越えてピア・ラーニング的に協働して学びあう場ともなる。また、スピーチコンテストや外国語劇等の指導を各エリアで行う意味も大きい。1年生が上級生の練習や指導の様子を実際に見ることによって刺激を受け、次年度の出場に対する動機付けを高める教育効果もある。

このように、マルクは、専攻内の交友関係を作る場となり、専攻言語の学習動機や専攻言語が使用される地域に対する関心を高める教育効果をもつ。同時に、1つの専攻言語における「縦の関係性」のみならず、専攻言語を越えた「横の関係性」の構築においても、マルクが持つ教育効果は看

過できない。マルクの名称—Multilingual Communication Center (多言語コミュニケーションセンター)—が表すように、マルクは多言語によるコミュニケーションが日常的に行われる場であり、さまざまな言語に触れる機会がある。各エリアの「談話空間」では、エリアの言語、日本語、英語の3言語が用いられる場合が多いが、それ以外の言語を用いた多言語コミュニケーションが行われる場合もある。藤田 (2011:223) が指摘しているように、建築としてのマルクの最大のオリジナリティは、さまざまな言語の疑似留学空間がワンフロアに結集した点にある。縦割りに分断されがちな言語と言語の間に関係性を作り出すことによって、多言語・多文化への関心を喚起する教育効果がある。このような特徴をもつマルクは、複次的な意味において「疑似留学空間」と言える。

先述したように、マルクでは、文化イベントや「談話空間」の活動等を通して疑似留学体験ができる。以下3章と4章で、ポルトガル語エリアで行った文化イベントと「談話空間」の活動について報告する。

3. 文化イベント

ポルトガル語エリアでは、マルクの活動がスタートした2009年度から2018年度現在にかけて、他言語エリアと比較して多くの文化イベントを開催している。通常の授業期間はほぼ毎月のように、イベントを開催している。

文化イベントを行う際は、現地でそのイベントがどのような意味を持つのか、実際に現地でどのように行われているのか日本語とポルトガル語による解説を入れている。また、イベントの際には現地の食べ物や料理を用意し、食文化も学べる機会としている。

2009年度から2018年度現在にかけて毎年開催している恒例行事は、フェスタ・ジュニーナとクリスマスパーティーである。2012年度以降現在まで毎年開催しているイベントは、ブラジル料理教室である。2014年度以降は「ブラジルの日」というイベントも開催している。以下それぞれの具体的な活動について報告する。

- (1) フェスタ・ジュニーナ: ブラジルを代表する一種の田舎祭りである。

マルクの教育意義を考える

ポルトガル語で「6月の祭」を意味し、ヨーロッパの豊作を祝うフェスタから影響を受けている。南半球の冬至は、トウモロコシやピーナツの収穫時期であり、また、カトリックの聖人（聖ペドロ、聖アントニオ、聖ジョアン）の日とも重なり、6月に開催されるようになった。フェスタ・ジュニーナは、教会はもちろん、学校、公園、自治会、また職場でも楽しめる老若男女問わず人気の祭りだ。

マルクのフェスタ・ジュニーナでは、上記の内容を説明した後で、クアドリーリャという一種のフォークダンスを全員で踊った。男女のペアが田舎道を散歩するというシチュエーションで、すべてのペアが進行役のポルトガル語の指示に従う。例えば、進行役がポルトガル語で「雨だ」と言うと、ペアは両手を頭に置き、進行役が「ヘビだ」と言うと、ペアは叫びながら逃げる。クアドリーリャは、ブラジル・ポルトガル語専攻（以下、「ポルトガル語専攻」と略す）の1年生が秋の学園祭でも踊るダンスである。1年生にとっては、踊りを通してポルトガル語の表現を学べる機会ともなっている。また、聖アントニオが縁結びの聖人であることから、田舎の結婚式をテーマとした寸劇も行った。神父の前で結婚の誓いを交わす新郎新婦は新郎の子供を身ごもった別の女性の登場で大騒ぎといったユーモアのあるものである。寸劇はブラジルの留学生、時折スペイン語専攻の教員の協力も得て毎年アレンジしながら行った。フェスタ・ジュニーナにはスペイン語専攻の学生も参加している。フェスタ・ジュニーナは農村の雰囲気が漂うユーモアに溢れた祭りであり、カーニバルとは異なる趣のブラジルの祭りを体験できる機会となっている。

(2) クリスマスパーティー：人口の多くがクリスチャンであるブラジルでは、クリスマスは宗教的な意味合いが根強く、家族親戚全員が集合して共に祝う日である。ブラジルのクリスマスイブでは、日が変わるのを待ってプレゼント交換と食事会をする。

ポルトガル語エリアでは、家庭でのクリスマスの雰囲気を再現するために、まず学生と一緒にクリスマスツリーを飾る作業を始める。パーティーでは、ブラジルでクリスマスの晩に食べる料理を用意する。当日は、ポル

トガル語のクリスマス・ソングの歌詞を配り全員で歌い、最後に希望者同士でプレゼント交換ゲームを行う。

今里と吉野は、英語専攻の学生が多く履修する選択外国語科目「ポルトガル語」を担当しており、その受講者もパーティーに参加したことがある。藤田(2016)がアンケート結果をもとに指摘しているように、英語専攻の学生のマルク利用率は総じて低い。こうしたイベントへの参加を通して、英語専攻の学生がマルクを利用しやすくなることが期待される。

(3) ブラジル料理教室：2012年度にアリーニ・ベアトリス語学専任講師の着任後に始まったイベントであり、年に複数回開催している。以下で挙げる、ブラジルで一般的に食べられる料理を学生たちと作った。

- ・ブラジル風揚げ餃子(パステウ)：秋の学園祭で、ポルトガル語専攻の1年生が作り、模擬店で販売している。学園祭準備前の前期に開き、どのように現地で作るのか解説した。
- ・ブラジル風定食(プラト・フェイト)：ブラジル風豆煮込み(フェイジャオン豆の煮込み)、目玉焼き、ライス、サラダの入ったいわゆるミックス・プレートである。日本人を顧客対象とする日本のブラジル料理店では提供されることが少ないが、ブラジルの家庭や食堂では一般的なメニューである。

衛生管理上、学生は厨房に入れられないため、料理のカットを担当する。教員はレシピを説明しながら、1年次に学習するポルトガル語の命令形を使って会話をする。「これを切りなさい」「このように開けなさい」といったポルトガル語の表現を実際のアクションを通して学べる機会となる。参加人数に上限があるが、レシピを持ち帰り家で再現する学生もいた。

(4) 「ブラジルの日」：ブラジルでサッカーワールドカップが開催された2014年に始まった。学生と教員がサッカー大会に参加し、ブラジルを代表する料理フェイジョアアダを体験できるイベントとなった。フェイジョアアダはフェイジャオン豆と豚の尻尾、耳、鼻等を圧力鍋で煮込んだ郷土料理である。ケールの炒め、キャッサバの粉のバター炒め、ライスとオレ

ンジを添えて食べる。今里とベアトリス講師は、オリジナルのパンフレットを作成し、フェイジョアダのレシピと起源に関する解説を載せた。フェイジョアダの起源に関しては、アフリカからブラジルに連れてこられた奴隷が開発したという説もあるが、南ヨーロッパの豆煮込み料理のアレンジであるという説が今では有力である。スポーツで汗を流した学生がフェイジョアダを食すのは重過ぎる印象もあるが、何杯も食べる学生もいた。

2014年度の「ブラジルの日」は、イベロアメリカ言語学科共催で行った。スペイン語専攻の学生・教員も参加し、スペインとメキシコの料理も提供された。約80名が参加したイベロアメリカ交流会となった。

神田外語大学では、2012年度の学科再編により、イベロアメリカ言語学科が誕生、スペイン語専攻とポルトガル語専攻は同学科内の専攻となった¹⁾。カリキュラムも変わり、1年次前期に両専攻の学生が同じクラスで履修する必修科目「イベロアメリカ研究入門」²⁾が開講した。学科再編に伴い、両専攻の学生と教員が交流する機会も増え、2014年度の「ブラジルの日」イベントは、こうした交流を象徴するイベントであったと言える。

「ブラジルの日」イベントと関連して、ポルトガル語エリアでは、サッカーワールドカップ全試合の組み合わせボードとトーナメント表を掲示した。試合結果や試合予想をテーマに、日本人学生と留学生が会話を始め交流するきっかけとなった。

上記(1)–(4)の恒例行事のほか、新入生歓迎会、留学生送別会、新年を祝う会等を開催した。また、外部講師を招き、サンバのイベントも開催した。

4. 「談話空間」

今里は、「談話空間」の時間に、学生とポルトガル語でコミュニケーションをとるように努めた。また、ポルトガル語によるスピーキング活動の一環として、ポルトガル語のスピーチや歌、劇の練習や指導を行った。以下、「談話空間」の活動の詳細について述べる。

4.1. ポルトガル語によるコミュニケーション

語学専任講師は、1・2年次の必修科目「ポルトガル語会話」の授業を担当していることもあり、各学生の語学レベルに合わせたポルトガル語会話をすることができる。語学専任講師が「談話空間」の時間で学生にポルトガル語を使って話しかけることによって、学生は数多くの授業でインプットされた知識をアウトプットできる機会となる。このように、語学専任講師は、ポルトガル語による働きかけに重点を置いてコミュニケーション活動を行っている。

また、授業で学生の学習段階や語学レベルに合った質問文をいくつか考えさせ、留学生か別の教員の「談話空間」の時間に回答してもらい、回答をその後の授業で発表するという活動を行った。この活動は、ポルトガル語でのコミュニケーションを学生自らの話しかけで始めるためのきっかけともなった。

4.2. スピーチと歌の指導

「談話空間」の時間には、学内・学外行事と関連した活動も行った。学内・学外で開催されるポルトガル語スピーチコンテストの練習と指導も行った。

学内のスピーチコンテストは、大きく2つのカテゴリーがあり、通常、1年生は詩を暗唱するカテゴリーの部に参加、2年生以上は弁論の部のカテゴリーに参加した。弁論の部では、各年の弁論テーマに沿ったオリジナルの原稿を作成しスピーチを披露した。

語学専任講師は、暗唱する詩を選び、詩の解釈やポルトガル語のニュアンス、歴史文化的背景について出場者に説明した。また、感情表現がより伝わるように、アクセントやイントネーション、ポーズの置き方等の音声指導を行った。

学内大会の弁論の部、および、学外のスピーチコンテストに参加する学生は、最初に各自でポルトガル語原稿の作成を行った。語学専任講師は、原稿を添削し、発音練習とリハーサルを行った。スピーチのようなパブリックスピーキングでは、日常の会話とは異なり、聴衆の気を引ける表現

マルクの教育意義を考える

やジェスチャー等も工夫する必要がある、こうした発表 (delivery) に関する指導も行った。スピーチコンテストでは、審査員が出場者にポルトガル語で質問するインタビューの時間もあり、語学専任講師は、出場者が審査員の質問にポルトガル語で適切に対応できるようインタビューに関する指導も行った。スピーチコンテスト出場という経験は、本人の努力次第で高度なポルトガル語力を身につける機会となる。語学専任講師は、学生の力が十分に引き出せるようサポートを行った。

学内行事が関連する活動として、他に、ポルトガル語の歌の指導を行った。今里は、ポルトガル語の歌を歌うサークル団体であるセレソン・カンダリーニョの顧問を務めていた。セレソン・カンダリーニョは、学園祭や学内のポルトガル語・スピーチコンテストでポルトガル語の歌を披露した。今里は、「談話空間」の時間に、マルクにある CD の曲を紹介し、学生とともに意見交換しながら歌詞の解釈を行い、練習を指導した。

5. 多言語・多文化コミュニケーション

3章で記述したように、フェスタ・ジュニーナや「ブラジルの日」のイベントにはスペイン語専攻の教員や学生も参加している。「ブラジルの日」のイベントでは、ブラジルの料理とスペイン、メキシコ料理も提供され、多言語・多文化を体験できるコミュニケーションの場となった。

マルクにおいて、多言語・多文化コミュニケーションは、こうした文化イベントの場においてだけでなく、日常的にも行われていることが推察される。2章で言及したさまざまな言語エリアが1つのフロアに結集した効果が表れていると見ることができる。

2014年度-2017年度にかけてマルクが行ったアンケート結果³⁾を見ると、学生は自分の専攻言語エリア以外のエリアも利用していることがわかる。その中でも、ポルトガル語専攻以外の学生がポルトガル語エリアを利用する割合が比較的高い。学生は主に自分の専攻言語エリアを利用するが、アンケートでは「主に使うエリア以外にどのエリアを使ったことがあるか」(複数回答可) 質問した⁴⁾。以下の表1は、直近4年間における全専攻の学生の回答数を年度別にまとめたものである。アンケート回答者は、2014年

表1: 利用経験のあるエリア(主に利用するエリアを除く): 複数回答可
回答者: アジア言語学科とイペロアメリカ言語学科の学生

	2014年	2015年	2016年	2017年	計	
中国語エリア	55	58	52	75	240	8.7%
韓国語エリア	57	50	53	64	224	8.1%
スペイン語エリア	80	74	66	86	306	11.1%
インドネシア語エリア	103	92	82	95	372	13.5%
タイ語エリア	93	80	88	85	346	12.6%
ベトナム語エリア	52	53	64	69	238	8.7%
ポルトガル語エリア	103	93	110	112	418	15.2%
インターナショナル・ エリア	143	162	151	150	606	22.0%
回答数計	686	662	666	736	2,750	100%

度が522名、2015年度が552名、2016年度が506名、2017年度が583名である。

さらに、アンケートでは、「そこではどのような活動をしているか」(主な活動2つにチェックを入れる)と質問した。最も多い回答が「友達と話す」で、全回答の3分の1以上を占める結果であった。

表1を見ると、インターナショナル・エリアを利用したことがある学生が最も多い。インターナショナル・エリアは、フランス語、アラビア語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語の学習、および、留学生の日本語学習を目的としたエリアである。スペイン語エリアと隣接した位置にあり⁵⁾、在籍者数の多いスペイン語専攻の学生が最も多く利用している。

インターナショナル・エリアを除く7つの専攻言語エリアの中では、ポルトガル語エリアを挙げた回答が最も多い結果となった。その中でも、スペイン語専攻の学生、東南アジアの言語(インドネシア語、タイ語、ベトナム語)を専攻する学生の回答が多かった。

マルクの教育意義を考える

ポルトガル語エリアには入り口を隔てる建築物がないため、他専攻の学生も比較的に利用しやすいことが考えられる。スペイン語エリアと隣接した位置にあるため、スペイン語専攻の学生は特に利用しやすいと言える。また、スペイン語とポルトガル語は共通する特徴も多いため、各専攻語の学生は各エリアの留学生やネイティブの教員とコミュニケーションもとりやすい。新カリキュラムの効果もあり、ポルトガル語を勉強しているスペイン語専攻の学生やスペイン語を勉強している専攻の学生も少なくない。

東南アジアの言語を専攻する学生は、ポルトガル語専攻の学生と同じクラスで英語の必修科目を履修する。このため、専攻を越えた交友関係ができ、ポルトガル語エリアの利用につながっていることも推測される。興味深いことに、ポルトガル語専攻の学生は、「主なエリア以外にどのエリアを使ったことがあるか」という質問に対して、東南アジアの言語エリアを挙げた回答数が多かった。以下表2は、直近4年間におけるポルトガル語

表2: 利用経験のあるエリア（主に利用するエリアを除く）: 複数回答可
回答者: ポルトガル語専攻の学生

	2014年	2015年	2016年	2017年	計	
中国語エリア	9	14	2	11	36	4.9%
韓国語エリア	5	7	9	5	26	3.5%
スペイン語エリア	25	25	27	21	98	13.2%
インドネシア語エリア	40	40	33	32	145	19.6%
タイ語エリア	41	32	36	30	139	18.8%
ベトナム語エリア	25	25	28	29	107	14.5%
ポルトガル語エリア	9	7	10	16	42	5.7%
インターナショナル・ エリア	34	43	37	33	147	19.9%
回答数計	188	193	182	177	740	100%

専攻の学生の回答を年度別にまとめたものである。回答者は、2014年が91名、2015年度が97名、2016年度が99名、2017年度が103名である。

表2が示すように、ポルトガル語専攻の学生に限った場合でも、最も利用経験が多いのはインターナショナル・エリアである。次に、利用経験が多いのが、隣接するスペイン語エリアではなく、東南アジア言語エリア(インドネシア語、タイ語、ベトナム語)であることが興味深い。

表1・表2が示すアンケート結果でさらに興味深い点は、インドネシア語専攻以外の学生によるインドネシア語エリアの利用経験が相対的に多いことである。インドネシア語エリアは周囲に低い壁があるため、他専攻の学生が入りにくいイメージがあるが、建築上の壁が利用の壁とはなっていないことがわかる。

専攻言語エリア以外のエリアの利用を通して、さまざまな言語や文化、多くの地域に対する関心や理解を深めることができると期待される。マルクにおいて、7つの専攻言語の疑似留学空間がワンフロアに結集した効果が表れていると見ることができ、言語間の縦割りを越えた多言語・多文化コミュニケーションが、自発的に行われていることが推察される。

藤田(2016:406)が記述しているように、2013年秋には、ポルトガル語専攻の学生の発案により、専攻を越えた交流イベントが行われた。自分の専攻言語エリア以外の学生とも交流したいという目的で開催され、2部構成で、後期に来日した留学生も含めて90名が参加した。藤田が述べているように、自分の専攻言語を越えて他の言語や文化にも強い関心を持つ学生が増えてきていることは大変望ましいことである。学生自らの提案によって、専攻言語を越えたこのような交流イベントが開催できるのも、マルクならではの特長である。マルクで多言語・多文化コミュニケーションを体験することで、日本にいながら世界を知る力が涵養されていくことを期待したい。

6. おわりに

本稿では、マルクの持つ教育効果を論じ、ポルトガル語エリアの活動事例とアンケート結果をもとに、マルクにおける多言語・多文化コミュニ

マルクの教育意義を考える

ケーションの一例を示した。

吉野は、2017年度と2018年度マルク・センター長として、マルクの理念は、ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages: CEFR)⁶⁾で述べる「複言語・複文化主義」の理念と通底するものがあると考ええる。詳細は別稿に譲るが、「複言語・複文化主義」の理念を教育において実現させる場として、言い換えれば、斎藤 (2017:69) が述べる「多くの言語が飛び交い、そのなかでどのような文化理解、コミュニケーションを図るかを主体的に考えられるような」場がマルクであると考ええる。

注

- 1) 2011年度までは、ポルトガル語専攻は国際言語文化学科内の専攻であり、スペイン語学科とは異なる学科にあった。
- 2) 「イベロアメリカ研究入門」は、両専攻の教員がオムニバス形式で担当している。履修者が各言語の特徴、各言語が使用される地域の文化、歴史、社会等を学べる横断的科目である。
- 3) 2010年度以降、マルク事務局では「MULC 利用に関するアンケート」を毎年行っている。本稿では、アジア言語学科 (中国語専攻・韓国語専攻・インドネシア専攻・タイ語専攻・ベトナム語専攻) とイベロアメリカ言語学科 (スペイン語専攻・ポルトガル語専攻) の学生を対象に行った回答を取り上げる。各専攻すべての学年の学生が回答、1年生と2年生の回答数が多い。2014年度-2016年度のアンケートは、12月中旬-1月中旬にかけて実施、2017年度は11月27日-12月22日にかけて実施した。アンケートの集計を行っている事務局に謝意を申し上げる。専攻別回答数等の詳細とその考察については、稿を改めて論じたい。
- 4) アンケートの質問項目は大きく8問あり、本稿では、その中の1問について取り上げる。
- 5) マルクの各エリアの場所については、以下の神田外語大学ホームページを参照。<https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/campuslife/facilities/mulc/> (2018年9月10日閲覧)
- 6) 詳細は、吉島茂・大島理枝他訳編 (2014) を参照。

参考文献

斎藤兆史 (2017) 「英語を本気で勉強すれば英語偏重の問題点が見えてくる」、鳥飼

- 玖美子他編著『英語だけの外国語教育は失敗する：複言語主義のすすめ』、ひつじ書房、53-70頁
- 藤田知子(2011)「〈教育活動事例〉多言語コミュニケーションセンター・事始め：2008-2010年度」『国際社会研究』2号、217-231頁
- 藤田知子(2016)「多言語コミュニケーションセンター：2011-2015年度の活動と展望」『神田外語大学紀要』28号、397-413頁
- 吉島茂・大島理枝他訳編(2014)『外国語教育 II: 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社 [Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge: Cambridge University Press.]